

## 超自然の〈水の精〉

——シレーネから人魚へ——

松 浦 暢

(一)

水の精ニクセは、われわれがアニメと名づける妖しい女性的な存在の、より本能的な前段階である。これに属するものには、セイレンたち、海の精たち、森の精たち、フルディンたち、魔性の娘たち、ラーミエたち、悪魔たちがあり、これらは若者たちを惑わし、その生命を吸いとってしまう。

ユング

〈宿命の女〉といえは、一般に十九世紀のラファエル前

派の申し子のように、一時代の一定の悪女像に限定する傾向がつよい。しかし、その原型は古典神話の時代から今日までつづく普遍像であることはいうまでもない。その悪女にしても、〈宿命の女〉の聖書的な存在、ブラーツ『ロマン派の苦惱』(一九三二)のなかで徹底的に探索されたように、じつに多種多様である。かれはロマン派の邪悪な〈宿命の女〉を、ルイスのマチルダから始まり、ヴェレダ、サランボアの系列と、カルメン、セシリ、コンチタの系列に二分化する図式は示したものの、この区分法の精しい説明はない。かれのやや通時的な解釈からすれば、〈宿命の女〉には(一定のタイプがない)という本音に終わら

ざるをえない。そこで共時的解釈も加味して、その複合的なマルチ像を、純情型、妖婦型、女神型、抽象理念型に大ざっぱに分類してみた<sup>(2)</sup>（小著『宿命の女』平凡社参照）。しかし、〈宿命の女〉の原型は、これでも不十分である。残忍非情な魔女タイプ、優雅な姿に獸性を秘めた好色的で欺瞞的な妖女タイプもある。靈的な永遠の光を放つ理想の女性タイプもある。人間の性本能がポジティブにもネガティブにも働く二面のあるように、男性の心に映じるアニマ的女性像は、フレキシブルで、さまざまな変容をみせる善・悪両タイプをふくむ複合像であり、単一タイプに限定することは不可能である。その多様性、両価性には驚くばかりである。

この小論では、この多様で魅力的な〈宿命の女〉像を、いままで触れていないロマン派の〈超自然の水の精、人魚〉に焦点をしばつてのべることにする。水の精が男性にとつては、アニマ的存在だとする引用のユング論は、水の精、人魚のもつ本質的な特性を説明するうえで有用である。このあと、ユングは、水の精を世のモラリストたちが、色恋の感情や空想の忌まわしい投影とみる見方を批

判、それは人間の意識の薄明りのなかで完全に自然と一体化していた時代から存在したもので、たんなる〈道徳的衰弱の産物〉ではないと、ニクセを弁護している。

たしかに〈水の精〉は、神話や伝説の時代、森や海や湖や川の精の跳梁していた昔から存在していたものであり、たんに想像上の幻覚とするには、あまりにも多くの実在感に溢れている。いってみれば、それは人間世界のカウンターパートの生物である。なるほど次元こそ異なれ、人間にありがちな背信、欺瞞のような悪徳と、自己犠牲的で愛他的な美徳の相反的要素や両価性をもっている。では、〈水の精〉は、いったいどこに現われるのであろうか。ユングは、水の鏡の比喩を用いて説明する。水の中を覗くものは、自分自身の姿をみる。しかし、まもなく、その背後に、〈水の精〉〈女性の人魚〉が浮かび上がるとい<sup>(3)</sup>う。水の鏡に映るのは、まず自分だが、やがて水の精が二重映しになるとい<sup>(3)</sup>うことは、水鏡に、じぶんのペルソナ、ふだん見えない自己のアイデンティティを発見するとい<sup>(3)</sup>うことだ。無意識の自己、心の内奥にあるものの顕現化、じぶんの真のアニマ的分身の発見と、水の精が、ここで結びつくわけである。

ちなみに、女性が「水の鏡」をみるときは、こうしたポジテイヴな意味に働かないことが多いようである。水鏡のテーマは、女性の「自己充足のシンボルとしての虚栄心」とふかく結びついている。女性は永遠にじぶんの影像をナルシスト的に捜しもとめ、「失ったウロボロスの完全一性」をみつつけようとするという。<sup>(4)</sup>しかし、「女性の実体」へ帰るといふ点では、男と同じである。男女ともに、程度差はあれ、じぶんのアイデンティティを発見しようとする。ただ男の方が、より理想的に水鏡に、心の内奥にあるアニマ像、「水の精」を探究しようとする傾きがある。水の精の人魚の多種多様な描き方をみても、肯かれよう。

(二)

文学——詩に表わされた「水の精」は、歴史的に古く、その系譜を辿るのは容易ではない。時代や国によっても、さまざまの呼び名がある。ナイアド、ネライド、ニクセ、ニクシー、マーメイド、トライトニッド、メーア・フラオ、セイレン(シレーネ)、ウォータ・スプライトなど、お

どろくほどの多様性を誇っている。強いて共通の特質といえは、水辺に棲み、美しい肢体で妙やかな歌をうたい、男を悩殺する蠱惑的な官能性であろうか。それに「半人半獣」の可変タイプの持主であることも、忘れてはならない。

まずメタモフォーシスを行う可変タイプで、邪悪でない、導きタイプの「水の精」といえば、『エンディミオン』(第二巻)の「水の精」をあげねばならない。彼女は、エンディミオンを破滅へと追いやる妖女ではなく、月の女神を求めこの牧人の水先案内をつとめる可憐な妖精である。はじめは「蝶」の姿で洞くつ近くの泉に導き、ふいに消えて美しい人魚の姿に変わる。

どんなにやさしい声音、どんなささやきか  
かれを愁わしい休息から、よびましたのか。

それは泉の小石の縁に、柔肌を胸まで  
みせた水の精だった。百合の花のなか  
こよなく麗しい 一族の妖精ながら  
立っていた。水のしたたる手で、そつと

彼に唇づけし、気づかわしげに捲毛を

じぶんの指に巻きつけながら ささやいた。<sup>(5)</sup>

「捲毛を指にまきつける」という所作は、処女の羞じらいがある。このシーンのイラスト（モクソン版・キーツ詩集<sup>(6)</sup>、シャーフ画）では、へ水の精<sup>(7)</sup>は腰から下が鱗のついた蛇で、尾の先は人魚のひれになっている。妖艶で怪異な外見とうらはらに、彼女は遂げられない想いに悩む牧人を慰めるために気を遣う。金や虹色の腹の澄んだ瞳の魚、水晶の寶石箱、貝殻や睡蓮、ミアンダ川の真珠の盃など、全



＜水の精＞—キーツ『エンディミオン』

てを捧げ代償にしても、彼の悩みを取り払いたいと希むやさしさにみちている。

しかし、書評というものは恣意的で、意外なもの、J・ロックハートは名高いキーツ酷評で、この詩行は読むにたえないエロチックな愛欲のシーンとみて、この水の精をキーツの創作した猥せつな超自然の女と決めつけた。狂気の（へ作詩癖）に陥ったコクニー派のへば詩人キーツ抹殺の使命を帯びた彼にしてみれば、こうした故意にコンテクストをはずした読み方が必要だったのだろうか。いまにしておもえば、時代のアイロニーである。

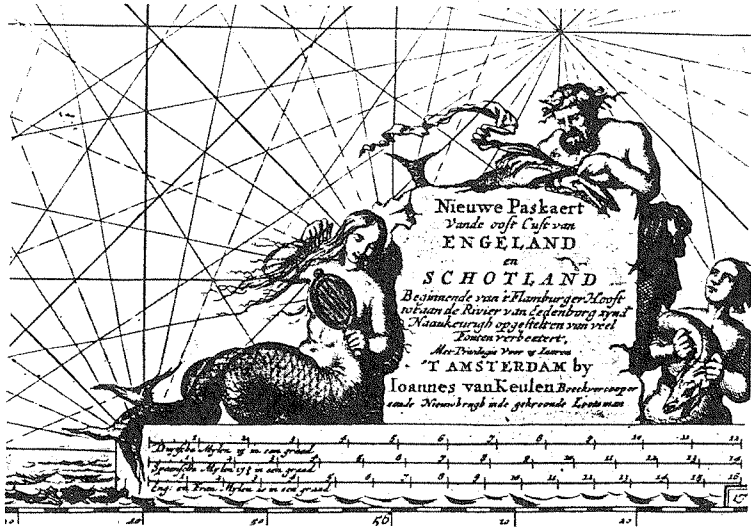
この水の精のように、月の女神と牧人をつなぎ、正しい導きをするディーモン（神霊）的で善良な水の精もいるが、反対の破滅タイプもある。幻想であれ、男を官能の網でとらえ、死の淵へとおびき寄せる（宿命の女）の（泉の精）が、ロセッティのソネットにある。

愛の神、わが心をうるおす泉に ふれるや

くらい さざ波ひろがり、女の波うつ髪となる。

おもわず身をかめると、女の唇がのびて、

水泡ふきつつ、わが唇に、とめどなく接吻をする。



「人魚」(1682年、オランダの海図より)

「生命の家」49番

裂かれた愛の苦悩にさいなまれる男が、泉のそばにエロスの神といる。ふと吹いたエロスのフルートが、男には女の情熱の声のように聞こえて落涙する。すると水底から愛する女がふいに現われ、水面に髪をひろげながら男を水面下に引きこもうとする怪異現象がおきる。しかし、これは本来、泉に住む妖精なのか、狂おしい男の慕情の生み出した幻想のイメージなのか定かではない。いや、この水の精がロセッティの熱愛していた友人の妻、ジェイン・モリスなのか、愛しながらも死に逐いやられた亡き妻リジーの亡霊なのかもわからない。ロセッティは泉の精に、自己の姿をみて、この二人の女性のいずれかを投影したといった方がよいだろう。ふしぎな哀感をたたえて、異次元的な妖女の水面に浮かぶシーンは、凄絶なものがある。魅惑の女性が、このように水底の世界に男を誘うのは、まさしく人魚が男を海に引きこむ誘惑と、死の構図が一致する。

(三)

水の精の原型アトキタイフの代表は、なんといつても「人魚アトメイト」である。へ誘惑するシレーネ」としての人魚の特質は、昔から絶対的に危険でタブー的な異次元的存在と考えられている。音楽やダンスを好み、予言能力や危険な魔力をもち、湖や川にも住み、海では船乗りを、その嫺やかな姿態と美しい歌声で誘惑する。魅惑された男は、舟を暗礁に乗りあげ死亡するか、または異次元の海底の世界へ連れ去られる。前者ではローレイ、古くはシレーネがいる。ローレイは語源的に、へ地中へへの意味があり、古代ゲルマン語の「潜むハイル」と「岩かげラゲ」に由来し、岩かげにかくれて獲物の男を待つ含意がある。後者の例には、海底の水晶宮に連れ去られるアイルランドの「人魚姫セイアン、コラ」の話がある。アイルランドの飢饉の年に一青年が「肌が白銀のように輝き赤い捲毛が白い胸にからまる」人魚に会い、飢えのない海底の豊饒の都へ引きこまれる。ブキャナンの詩では、はるか青海原の下の輝く都に魅せられた青年がうたわれる。

人魚の髪は いま滴り落ちた  
血よりも鮮やかな赤色だが あなたは  
人魚と いまより結婚して

罪を分かち合う さだめ。

なお 哀れにも あなたは

海底の人魚の かがやく都に

葬られる さだめ。

ふしぎな旋律で蒼白い人魚たちが、シュル、シュル、ア  
ルーンとうたう。美と恐怖、好奇心と死の同居する海底の  
都の妖しさには、歴史的な事件、飢饉の史実がからんでい  
る。コーンウォールの漁夫ルーティの民話も、これと同根異形である。嵐のあとの岩場の水たまりに、みどり色の瞳と金髪の人魚を見つけて海に帰した報酬に、彼は邪悪に克つ力と、病気を癒す力を与えられる。しかし、数年後の嵐の晩に沖に出て、再来した人魚に引きこまれ、海底の異次元の世界へ行ってしまう。浦島太郎は、海底に三日だけ滞在して地上へ帰されるが、地上では三百年が経過して、かれ自身も煙となって消滅する。しかし、ルーティは、二度と人間世界へ戻ることはなかった。いずれを待つ

のも、〈死〉の運命だった。

ときには、想像上の生物の人魚は、人間の男と結婚して地上に住むこともある。それは「人間の魂欲しさに男に言い寄り、熱愛して一体化し、魂を手に入れる」(パラセルサス<sup>9</sup>)ためである。フーケの『水妖記』<sup>10</sup>でも、一族の住む美しい住処、色とりどりの珊瑚樹の輝く水晶宮をはなれて、ウンディーネは騎士への愛のため人間世界に住む。その結果魂をうる。〈水の精〉は、待望の魂をえたものの、「魂を持つ人々のさまざまの苦しみ」<sup>10</sup>を受ける運命となる。不誠実や虚栄にみちた人間世界の悲哀を味わい、やがては、夫の騎士の誤解と悪罵を浴びて、水の世界に帰る。しかし、夫が別の女ベルタルダを娶ることになって、ついに水精の世界の厳しい掟にしたがい、いまは、人間の魂をもち感情をもつウンディーネは、涙を流しながら夫の命を奪うのである。こうした愛憎のホモロジは、ワイルドの『ざくろの家』の中の短篇「漁夫とその魂」にも、みられる。ある夕昏れ、若い漁夫は「網にかかった美しい人魚」を引きあげる。人魚を網にかけるのは、人魚譚の共通のありふれたモチーフだが、ワイルドの作品は一味ちがっている。金髪に、白い象牙色の肌、銀と真珠の尾をもつ人魚に恋心を抱

いた漁夫は、魂を肉体から分離することを条件に、人魚と結婚する。〈魂の本体の影〉をナイフで肉体から切り離した漁夫は、海底の都に住むが、かつてのじぶんの影に頼まれて一年毎に影と会う。しかし、邪悪に染まった魂は三年目に、うまく漁夫の肉体に復帰し、白い足で踊る人間娘の町へ行こうと漁夫をだまし、水の都から地上へもどす。そのため後悔した漁夫は、愛する人魚のもとへ帰ろうと、再度ナイフで影を切りのけようとするものの、この方法は二度目には効果がなかった。そのため、人魚は死体となって海岸に打ち上げられ、漁夫も死亡する。二人の遺骸を神父は仕置人の墓場に植えると、世にも美しい花が咲き出て祭壇をもおおってしまう。神の怒りについて話す予定の説教が、神の愛の話となり神父の目にも涙がにじみ出る。翌朝、人魚の住む人江で神父が祝福したが、美しい花は二度と咲かず、人魚も入江から姿を消す。ワイルドは、ここで遅すぎる神の祝福を暗示し、人間界の卑小なモラリティよりも、異教の愛が、いかに深く哀切なものであるかを示唆している。魂の偽善性よりも、愛の至福の尊厳にプライオリティを置いていようである。

フーケやワイルドの物語からも、人魚が人間の魂をうる

ことの功罪を考えさせられるが、ともあれ、人魚が「魂」を求めるのは、まちがいない。そして地上で男に裏切られると、水の世界へもどるのである。これと逆のケースは、M・アーノルド『見棄てられた人魚男』がある。ここでは、人間の女が人魚男と海底に住み、子供まで作るものの、聞こえた教会の鐘の音で人間世界へもどる。本来の世界へのノスタルジアと女の利己心が邪悪に働いている。月光の明るい晩、人魚男は子供をつれ恋しい妻の姿を求めて人里にでる。子供に母親の名前を連呼させるが、その声も空しい。やがて、父と子は淋しく水の世界へ去るのである。

このように、水の妖精の人魚は、「宿命の女」として善・悪の両面をもち、愛に殉じる純情型、男を破滅させる妖婦型、探求者をみちびく女神・ディーモン型など、可変的で多様性に富んでいる。どちらかといえば、悪女タイプの多いのは、人間の海へ対する「水恐怖症」や「死恐怖症」と、深層心理的に、結びついているからだろうか。

水そのものが、すべての生命を生み出す「母なる物質」であるとともに、水死によって煩惱の生を断つエレメントでもある。海はゆりかごと墓場、生命の源と破壊者という

両価性をもち、人間の有限の岸辺と神秘的で無限な領域を結ぶ存在である。また精神的再生と復活を約束するいつぱうで、忘却と不滅性のシンボルとなる。この意味で人間は、水を恐れるとともに、水への回帰をひそかに願っている。

「人魚」の姿が、上半身が女性、下半身が魚か蛇というのも暗示的である。キリスト教的なアイコングラフイで、人魚は「女性の姿をした蛇」で、蛇が人魚のルーツである。

○B)でも、人魚と同義的なシレーネが、「想像上の蛇の一種」でカトリック教会のラテン語訳聖書のイザヤ書(X・iii・22)のシレーネの例をあげている。蛇には「邪悪・誘惑・欺瞞」の下降調のイメージと、「永遠・再生・母なる女神」という上昇調のイメージがだぶっている。人は前者の魔性タイプの人魚を熱愛して「苦痛淫乱」の快楽に責め苛まれ、あげくには、後者のよい母像・女神タイプの人魚に救済されたい願望をもっているのではなからうか。官能的な「低次のヴィーナス」と精神的な「高次のヴィーナス」というヤーヌスの二面、かぎりない両価性こそ、人魚のもつふしぎな魅力の源となり、その謎をふかめている因子となっているようである。



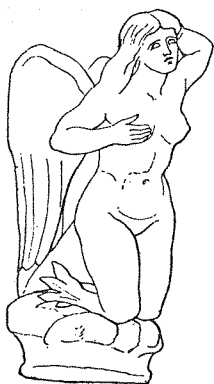
歴史的にみて、シレーネ(セイレン)こそ人魚のルーツ的存在とおもわれる。それは、水の精の原型、シレーネの姿態の外形的変容から、類推することができる。初期ギリシアの古典時代にあつては、シレーネは上半身はあでやかな女性で、背中には翼があるが、下半身は魚ではなく鳥の「半人半鳥」<sup>バード・ウーマン</sup>だつた。ヘレニズム時代(紀元前三〇〇年以降)<sup>フレイシユ・ウーマン</sup>には、下半身が、鳥ではなく魚の尾ひれのある「半人半魚」に変わるのが、何よりの例証とならう。

OEDの「人魚」の初出例は、やつと14世紀のチョーサーからである。もつとも二五〇BCのアテネのテラコッタ像の「歎きのシレーネ」は、上半身の女性像に翼がありながら、下半身の膝までは人間、膝から下が魚のひれに<sup>(11)</sup>ついた折衷型シレーネである。

古代ギリシア人は、ときとしてシレーネを顔は女で、身体は鳥の残忍な忌わしい怪物ハーピィと同一視することもあつたらしい。ハーピィが死者の魂を運ぶ妖女であつたところから、シレーネも人魚を人間の魂と関係づけるように

なつたのだろう。古代ギリシアでは、シレーネは、またケレス(亡霊・精霊・デーモン)のひとつだつたが、このシレーネを美しい歌声をもつ誘惑の魔女、恐ろしい海のファム・ファタールとしたのは、ホメロスである。オディッセウスがキルケの忠告を入れ、シレーネの島を通過するとき、部下の耳には「へみつろう」<sup>デー・ワツツス</sup>を詰め、自分はその歌声を聞くために、帆柱に身体をロープで縛りつけさせた。夜明けの風のように軽やかで、凧の海の息吹き、葦間の風のささやきをひとつにしたような甘美で致命的なメロディに、ホメロス一行の耐えられたのは、この工夫のためだつたのだろう。

キーツの『エンデイミオン』(IV・一五二―一五七)の悲しみのオードでは、「月光もないシレーネの塩からい泡沫のとぶ浜辺」が出てくる。妖女シレーネの犠牲者の朽ちゆく白骨の重なる凄惨な磯辺に打ちよせる波を、つぶら瞳から奪つた情熱の赤らみが彩るという発想は、ユニークでありアルな発想法というべきだろう。古典時代のシレーネは、岩山や断崖に住み、船乗りを襲うというのが、共通のパターンである。いわば、シレーネの歌声に聞き入ることは、「肉体的死」であり、比喩的には、官能的な妖女の誘



「歎きのシレーネ」  
(アテネでのテラコッタ像)  
(250 B.C)



「オディッセウスとシレーネ」  
スタムノス出土アテネの壺 (大英博物館蔵)

惑に負けるため、〈道徳的な死〉でもあった。もつとも、プラトン以降の解釈によると、シレーネの唄は、〈天球の音楽〉であり、肉体的限界を超え、知的世界へ進む人間の憧れを表わしたらしい。

シレーネが見えない海の危険、美しいが恐ろしい女、世俗的誘惑の魔女人魚とする解釈は多い。ドライデンの「この人魚の唄は、すみやかに君を惹きよせる／見たこともない渦巻へ」の詩行も、それを示す興味ある一例である。人魚の唄は、シレーネの歌のことであり、〈渦巻〉は、六頭十二足の食肉怪獣のシーラの住む島の近くにある大渦巻、カリブデイスへの言及である。この島は、シレーネの島の次にあり、オディッセウスが、彼を待ち受けた、このもとは美しい人間女性で、いまは恐ろしい怪獣のため、難に遭ったのは有名である。

〈鳥女〉から〈人魚〉へのシレーネ変身の解釈は、すでにアリストテレス、プリーニウス、オウィディウス、それに中世の動物説話集に明らかだが、その変身の理由は何だろうか。シレーネが船乗りへの脅威だったから、海の生物の魚を連想した、河の神アキラスの娘だから魚のひれがついた、鳥の形より優美なひれをもつ魚が好ましかったから、

と諸説ふんぶんである。卑しい目的や、生命の始原状態へと誘惑する墮落した想像のシンボルとみる解釈までとび出す始末である。

理由はともあれ、中世から近代にかけての芸術家は、胸まで垂れる金髪をくしけずりながら、魅惑の歌をうたう妖艶な美女、ローレライの妖精と、シレーネ<sup>シレーネ</sup>人魚を同一化したのは自然なことであった。しかし、人魚をえがくとき、つねに官能の陶酔と死への誘惑がつきまとったことは、いうまでもない。異端のシレーネや人魚が、洗札を受けられず、魂の救済のないため、人間の魂を欲しがった伝説も、この〈死〉を軸として生まれている。バックリン画『しずかな海』の人魚の魔女性性は、官能の愛を代償に同族のトライトンをも殺しているし、モロー『詩人とシレーネ』では尾の二つに別れた凄い目つきシレーネのシレーネが、詩人を隸従させ、レイトン卿の『漁夫とシレーネ』には、陶酔した漁夫を、死の海へ抱擁して引きこむ、恐ろしくも愛らしい人魚が描かれている。

不死に近い人魚と、有限の命の人間のあいだには、はじめから超えられない時間と空間のギャップがある。それだけに、異次元の恋は、いっそう凄まじく、哀切となる。ス

コットランドの民話に基づくT・ホップの「人魚」も、その一例である。百年以上もむかし、山中湖の人魚と、片思いをした男の哀しいバラッドである。男、女、ナレーターの三者のダイアログが交錯し、悲劇感を高めるとともに、時間的推移を写しだしている。

男は、女が荒れはてた丘に住む水の精であることを知りながらバラ色の頬とサンゴ色の唇を求めて傾斜してゆく。人魚は、不可能な愛の結末を予感して男の愛を退ける。男は、たとえ山奥の湖の精、〈水晶の波〉の国の乙女でもよいと重ねて愛を歎願する。しかし、受け入れられずに、男は死亡する。

ああ 情熱は 死よりも、見はてぬ  
人世のことよりも、なお恐ろしい。

山中湖の 人魚は ぼくを  
誑かして 殺したのだ。

このあと、ナレーターは、ふかい森の奥、湖のほとりに男の墓を作らせたこと、夕昏れ、この人魚が悲歎のうたをうたうシーンを目撃したことをのべる。つづく十節は、男

の死後に慕情をつのらせた人魚の悲しみのうたである。この超自然のケルト系の人魚は、二人の超えられない世界のために、男の愛を拒否したことを後悔し、墓のうえに涙を流す。「しずかにお眠り、いとしい人よ、しずかにお眠り／明日の日まで さようなら<sup>(14)</sup>」。

しかし、異次元の二人に、明日の日の世界のあろうはずがない。死ぬ人間とはちがって、不滅に近い美と若さを誇る人魚には、魂の救済の来世のあるわけではない。惹かれながら同一化できないのが、異なつたエレメントの住民の運命ではないか。水の精の世界の厳しい戒律は、ウンディーネの物語にみるように、人間との馴合や同一化を、頑なに拒んでいる。そこで、フッドの「水の精」のように、人魚はへ男のみてはならぬもの」というタブーが、生まれるわけである。

男のみてはならぬものを

月光が 照らしだすと！

流れに 乙女をみたが

この世ならぬ 美しさ<sup>(15)</sup>。

この六節の詩では、夜の川に幻影のように浮かんで黒髪を梳<sup>くしけず</sup>る人魚に男が見惚れている。しかし、人魚は男の視線を知つて、<sup>(16)</sup>幾重もの波紋をのこして、水中に消える。

「この身は土くれの身、あの人は、とわの生命」の詩行には、残された男の哀傷の叫びがある。人魚の世界には、特定のタブーがある。この掟を、みずからではなく、人間によつて破られても呪は降り、人魚は死ぬ。アリングアムの「妖精湖の人魚」も、人間の奸策、岡惚れした男が故意に妖精の帰る時間を遅らせたために、湖に三つの血糊を残して死ぬ運命になる。

しずかに清らな <sup>みもと</sup>三本の睡蓮

愛さぬ人として なかつたものの

なかでも ひとときわ 牧師の息子

やさしの歌に 聞きほれて

<sup>エルフィン・メテ</sup>妖精湖の乙女に、つきまとう。

夜のくるたび 哀願するが

帰られてしまつて 歎くばかり。

へはるか、はるか、遠いむかし

風そよぐたび 葦笛は <sup>咽ぶ<sup>(16)</sup></sup>

各節の終わりの二行のリフレインの哀調が、効果的に用いられ、三人の人魚の悲劇的末路を伝えている。こうした人魚は、疑いもなく自然の生物で、じぶんの世界の戒律に忠実な、受身的な「水の精」である。ウンディーネなども、こうした可憐で素直なタイプの水の精である。しかし、シレーネは「侵略的で、食肉性<sup>プレドリー</sup>で、ときには色情狂的な性欲」をもつものと考えられる。つまり、より積極的な、人間の男に近づき誘惑する「宿命の女」の要素がある。悪くいえば、女性の獸的な要素を擬人化したものであり、「海の冷たい子宮の、危険で獸的な先祖がえりの申し子<sup>(17)</sup>」とまでいう批判家もいる。しかし、シレーネが人魚となり、より優美で<sup>たやか</sup>嫺かな姿になると、消極的な女性らしさの擬人化となる。人魚、つまり「水の精」が、さらに理想化されると、美しい女人の姿になる。イエイツ「さまざまのインガスの歌」では、川の精の人魚が、白い鱗<sup>また</sup>となつて釣られる。そのあと、また美しい人魚(女人)の姿に戻り、輝く銀色の夕もやのなかに消える。この人魚を追つて、ナレーターのは、死ぬまで探求の旅に出るが、いつのまにか白髪の老人となり死が迫る。それでも永遠の憧憬の対象の「水の精」を、死ぬまで求めてやまない。こうな

れば、「水の精」は、もはや伝説や架空の生物ではなく、人生の目的、見はてぬ憧憬の夢、人生の理想そのものへと昇華してゆく。

いってみれば、詩人の心に映るアニマ的「宿命の女」、詩人のアイデンティティそのものである。水の鏡に映るじぶんのペルソナ、それと二重うつしに現われる水の精は、芸術家の心の奥の自己顕現といってよい。この水の精の映像の記号論的読解も、新しい自己発見につながるかもしれない。神話や伝説のペールにかくれながら、文芸の歴史に水の精の生きつづける謎も、この理想の原型探求、自己のアイデンティティ発見の欲求と離れがたく結びついている。水面下に見えかくれする「水の精」の善・悪、二面の両面性、変幻自在の華麗で複雑な多様性、その「捕えどころ<sup>グネス</sup>のなさ」こそ、つきない魅惑といえるであろう。

#### 〔註〕

- (1) C・G・ユング・林道義訳『元型論——無意識の構造』(紀伊國屋書店、一九八二年) 64ページ。
- (2) 松浦暢著『宿命の女——愛と美のイメジャリー』(平凡社、一九八七年)、11、13ページ。

- (3) エング前掲書、64ページ。
- (4) Bram Dijkstra: *Idols of Perversity* (1986), P.135.
- (5) John Keats: *Endymion*, Book II, 98-103.
- (6) *The Poetical Works of John Keats* (Edward Moxon, 1854)
- (7) John Gibson Lockhart, "The Cockney School of Poetry, No. IV," *Blackwood's Edinburgh Magazine* III (Aug. 1818), P.519.
- なお、この酷評については、左の小論がある。
- 松浦暢「初期キーツ批評の動向について(2)」『英語青年』第14巻、第五号(一九八八・八・一)27ページ参照。
- (8) Robert Buchanan: *The Midian-Maid*, St.1.
- (9) C.L.Daniels & C.H.Stevens: *Encyclopaedia of Superstitions, Folklore and the Occult Sciences* (Gale Research Co., 1971), vol. II, P.1073.
- (10) フーケ『水妖記』柴田治三郎訳(岩波文庫、一九七八年)99ページ。
- (11) B. Benwell & A. Waugh: *Sea Enchantress* (Hutchinson, 1961), P. 47.
- (12) John Dryden: *The Spanish Friar*, iv. ii. 60.
- (13) James Hogg: *The Mermaid*, xiii.
- (14) *Ibid.*, xxv.
- (15) Thomas Hood: *The Water Lady*, St. 1.
- (16) William Allingham: *The Maids of Elyn-Mere*, St. 1.
- (17) Bram Dijkstra: *Idols of Perversity* (1986), P. 258.

\* 本論文は一九八八年度、成城大学特別研究助成費による研究成果の一部である。